

②岳間地区(山鹿市鹿北町)

お茶香る山里岳間の未来へのチャレンジ！
～地元の宝を磨き上げてステップアップ～

ビジョン策定年度：平成29年度 目標年度：令和3年度



1. モデル地区のプロフィールと現状

◆ 農業者に関する状況

(平成29年度)

・総戸数	315戸	住民基本台帳(H29.3.31)
・総人口	865人	住民基本台帳(H29.3.31)
・農家戸数	160戸	2015農林業センサス
・農業者数	154人	2015農林業センサス
・担い手数	40人	2015農林業センサス
・65歳以上の農業者数	83人	2015農林業センサス

◆ 農地に関する状況

(1) 面積区分

・水田	79ha	2015農林業センサス
・畑(樹園地除く)	14ha	2015農林業センサス
・畑(樹園地)	117ha	2015農林業センサス

(2) 作付区分

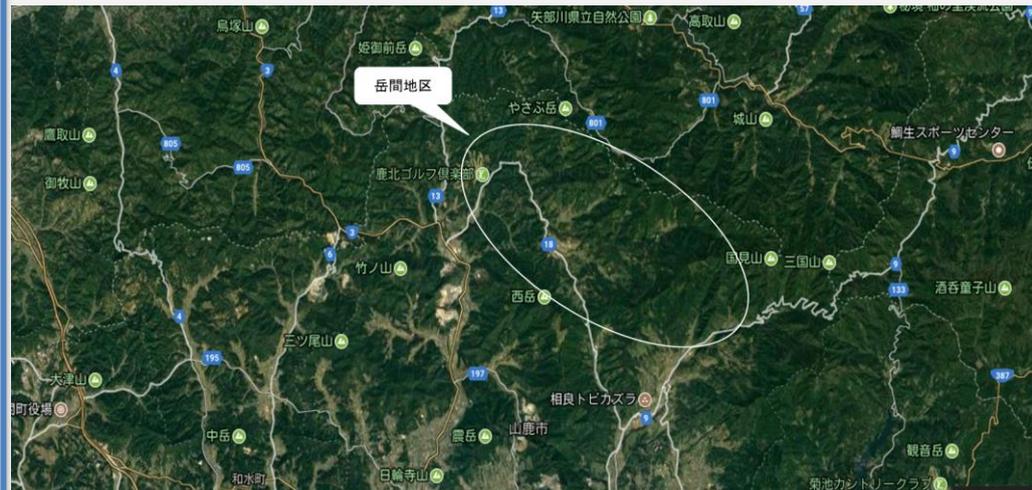
・水田	米、アスパラ、菊
・畑(果樹園)	茶、栗、たけのこ

◆ 基盤整備に関する状況

(1) ほ場整備	2.57ha整備済
(2) 耕作道路	舗装済
(3) 排水	コンクリート水路
(4) 用水	水路から直接取水

◆ 集落の現状

- 地区の農業従事者は65歳以上が54%を占めている。
- 地区の農地のうち田については約7割、畑については約8割が未整備のため、小型機械の導入しかできず、効率的な農業が出来ていない。
- 耕作条件が悪いため、農地の汎用化ができず水稲単作の作付けであるため、収益が思うようにあがらない。
- 不整形で狭小な茶園が機械化の支障となっている。



2. ビジョン策定のプロセス

(1)ビジョン検討のスタートに向けて

平成29年の農業ビジョン策定以前に、別事業で2度のビジョン策定の機会があった。

◆平成25年:岳間小学校閉校後の活用について

岳間小学校の閉校を機に、地域づくりのビジョン策定があった。山鹿市の地域づくり補助金を活用して、閉校後の小学校を地域活性化の場にできないかと考え、『岳間を考える会』を発足。その際、山鹿市役所にインターンシップで来ていた大学生とともに、地域へのアンケート調査を行なった。

結果、「小学校を残したい・活用したい」という声が多く、建物が耐震設計になっていることもあり、小学校を活用する方向で決定した。1階を交流施設に、2階を図書館にすることで合意。1階の交流施設『ほっと岳間』は、今回の農業ビジョンでの要の場となっている。

◆平成27年:山鹿市の地域づくり創生協議会

山鹿市の創生事業を活用し、農業関係のビジョンを作った。中山間地と平地の2班に分かれて話し合いをした。特に中山間地では鳥獣被害が深刻だったため、その対策をメインにビジョンを立てた。

その他にも、農業体験ツアーなどの観光プラン調査・実施を行った(現在も進行中)。これらの経緯もあり、「岳間の活性化」という土台の目標づくりができていた。そのため、地域としては3度目となる農業ビジョン策定もスムーズに進行することができた。



観光モニターツアー

(2)協力体制

2度のビジョン策定の際に立ち上げた各組織は、メンバーが重なっているため、農業ビジョンの組織づくりもスムーズだった。人口800人の地域・もともと住人のつながりが強いという**地域の特性**※があったため、役割分担・協力体制で合意形成もやりやすい状況だった。

また、以前より集落ではなく校区で活動をしているため、協議や合意についてもまとまりやすかったように思う。

※地域の特性

- ◎明治時代から自立していた地域:熊本県で最初に信用組合を作ったのが岳間と言われている。
- ◎地域営農組合『岳間の杜』:集団農業を目指して平成7年に発足。
- ◎648(むしば)会:10数年前、自然にできた集まり。岳間に地縁のある20~50代の約60人で構成。除草作業やポイ捨て防止看板設置など、地域貢献活動を実施。



648会。岳間のシンボル『西岳』の標高にちなんでネーミングされた。

(3) 検討の経緯

岳間地区活性化協議委員会を作った。活性化協議委員会の委員は、茶業従事者をメインに、別ビジョン策定の際に関わったメンバーで構成された。

地元自治会	区長3名
地域営農組織	(農)岳間の杜 上権持営農組合
茶店舗	古田製茶 藤本製茶 岳間製茶 東茶舗
JA鹿本	茶生産部会
NPO法人	岳間ほっとネット
観光組合	岳間渓谷観光組合
山鹿市	地域おこし協力隊
学識経験者	1名(会計)

←
岳間地区活性化協議委員会構成メンバー。区長や各代表者が他団体の中心メンバーを兼ねており、コミュニケーションや情報伝達がしやすい構成になっているという。

◎まず、協議委員会と区長、分館長でワークショップを3回実施し、地域の課題・将来像を確認していった。熊本県立大学の野口教授にアドバイザーとして入ってもらい、野口教授の講演・KJ法ワークショップを行った。会場はすべて、閉校した岳間小学校跡地に作られた地域交流の場『ほっと岳間』で行われた。

◎ワークショップのテーマは以下の通り。
(WS1回目/平成29年8月)集落の現状と課題について
(WS2回目/平成29年9月)集落の活性化策について
(WS3回目/平成29年9月)農業ビジョン作成について

◎ワークショップ進行と同時に、課題としてあがってきた現地の状況を協議委員会で現地調査していった。

現地調査結果とワークショップのまとめを基に、集落の目指す方向性や具体的な整備策の確認を活性化協議委員会役員で行った。

平成29年10月に、最終確認を各集落で行い、すべての合意をとった。



←
3度のワークショップで地域課題を出し合った。



↑
KJ法による課題・意見の集約、整理。



→
ワークショップはすべて旧岳間小学校「ほっと岳間」のかつての教室で行われた。

(4)ビジョンの合意形成

課題の優先順位をどのように決めていくかは、活性化協議委員会のメンバーにとっても初めての経験であり、かなり悩んだという。

その中、下記のような手順で優先順位を決定していった。

◆まず課題優先順位決定表を作り、活性化協議委員会と市の職員とですべての要望について現地に出向き、リサーチ(現地調査)を行った。

◆現地調査の段階で、要望の採択や優先順位付けについての現地の合意を取り付けていった。

例えば「3人でトラクターを購入したい」など個人的な要望は却下、営農組織などの取り組みについては採択など、細やかに現地で確認と合意をとっていった。

◆合意形成については、普段から住人同士の密接なつながりがあるのと、各集落のリーダーの信用が厚かったため、理解してもらえた。地域内における「普段の関係性」が合意の形成(地域の納得)の役に立ったようである。

◆モデル地区農業ビジョンの検討の流れ

番号	日付	場所	話し合いの内容	参加人数
1	H29.8.8	ほっと岳間	・事業概要、協議会規約、役員等について確認。 ・集落の現状や課題について、ワークショップ形式により話し合った。	22名
2	H29.9.7	ほっと岳間	集落の活性化策について、ワークショップ形式により話し合った。	18名
3	H29.9.22	現地	要望の挙がっている現地の状況を調査した。	7名
4	H29.9.27	ほっと岳間	集落の活性化に関するワークショップのまとめ、農業ビジョン作成に関する話し合いを行った。	16名
5	H29.10.6	ほっと岳間	役員により、現地調査結果とワークショップのまとめから、集落の目指す方向性、具体的にどのように整備等を行っていくか確認を行った。	7名
6	H29.10.25	ほっと岳間	農業ビジョンについて、最終確認を集落で行った。	12名



ほっと岳間
閉校した岳間小学校を、
地域の交流の場『ほっと
岳間』として活用。

3. 集落の「課題」と「将来像」

◆集落の課題

- 農業への魅力が感じられず、若者が地域から離れていく。
- 岳間の農産物の認知度が低い。
- 担い手を確保したいが、地区内では十分に確保できない。
- 農地や施設等の保全管理ができなくなるため、耕作放棄地が増加する。
- 集落機能が低下し、存続できなくなる。
- 鳥獣被害が深刻である。

◆集落の目指す将来像

- 新規茶種(碾茶・抹茶)による茶の活性化を図っている。
- 水田・茶園の整備により、現状より大型の機械を導入し、生産を効率化している。
- 耕作条件を改善した農地で、今まで導入できなかった施設園芸等が可能となり、高単価な作物を導入している。
- 営農組織等の安定経営(労働力確保を含む)を行っている。
- 認知度向上による交流人口の増加を図っている。

◆成果目標

- 碾茶用茶葉の栽培面積を2ha以上増加させる。
- 観賞用ホオズキの作付面積を10a増加させる。
- ワーキングホリデーを1回以上実施する。

(1)課題認識に変化はあるか

◆解決へ向けての進捗

高齢化で農地を縮小するところが増え続けているため、未だに耕作放棄地の問題は深刻である。

いまだ耕作放棄地の問題は深刻である。高齢化で農地を縮小するところが増え続けているためである。

平成27年からスタートした農林水産省の『中山間地域所得向上支援対策』の補助金活用を考えていた農家も、高齢化で田畑を管理することが難しくなり、現状は耕作放棄地となりつつある。

耕作放棄地が増えると、そこがイノシシのひそみ場となりさらに鳥獣被害が増えていく。そのような箇所は「農業振興地域から外れて、山林に戻したほうがいいのではないか」という話も出ている。

◆新たな課題

新たに付け加える課題は、今のところない。

(2) 将来像に修正は必要か

以下、2つの修正が必要と考えている。

◆新規茶種(碾茶・抹茶)による茶の活性化の見直し

農業ビジョンを策定した平成29年の時点では碾茶の需要拡大が見込まれていたが、この2年で需要が拡大し、現在は飽和状態になりつつある。また、中国でも碾茶栽培が始まり、マーケット状況に変化があった。加えて、茶工場の耐震基礎施工が当初の見積り額の倍額になり、採算が合わなくなってきている。

企業に茶の需要リサーチを行ったところ、高級茶よりも加工品用の安価な茶葉の需要が多かった。

以上のことから、流動的な需要に対応しつつ、新規茶種への取り組みについては調整検討を重ねている。

◆施設園芸作物の見直し

施設園芸作物として、当初は菊をターゲットにしていたが、想像以上に労力がかかり、高齢化が進むなか継続的な所得確保としては厳しくなってきた。

そのため、安定的な需要があり、比較的労力の少ないホオズキ栽培への移行を検討中。

現在、菊部会の一部がホオズキ栽培をスタートし、状況を見ている。ホオズキ栽培は岳間の涼しい気候に合っている。



4. 取り組み状況

[ビジョンの内容]

(1) 所得の確保

- ◆耐寒性早生品種への新植・改植や高単価が見込める茶種である碾茶の生産を行う。
- ◆クリ老木の改植や観賞用ホオズキの導入を行う。
- ◆新たな加工品等の開発を行う。(クリの甘酒・茶の加工品等)
- ◆鳥獣被害防止対策を実施する。

(2) 担い手の育成

- ◆ワーキングホリデー等の取組みにより地域営農組織等における担い手の確保を行う。
- ◆クリの剪定作業受託組織の育成を図る。

(3) 基盤整備の実施

- ◆現況の棚田3、4枚を1枚にまとめ、約20区画を作る。
- ◆耕作道の整備、用排水路の更新を行う。
- ◆茶園の新規造成(5区画)、区画整理(5区画)を行うことで、早生・晩生の品種への新植・改植、高単価が見込める茶種である碾茶の生産、乗用型摘採機の導入を可能とする。

(4) 岳間の認知度向上

- ◆SNSを活用し、情報発信チャンネルの拡大を図る。
- ◆筍、クリ等の地域特産物をPRし、都市農村交流を図る。
- ◆ほっと岳間を活用し、清流文化の形成を図る。

[各項目の取り組み状況]

(1) 所得の確保について

◆取り組みの状況と成果

◎新種茶葉・施設園芸作物の見直し・調整をしている。流動的な需要の変化を見ながら、継続可能で収益の確保ができる点を調整している。

◎耐寒性早生品種茶葉への新植・改植は、5年ほど前から進めている。耐寒性早生品種は幼木なので数年待つ必要があるが、各茶業者で面積を増やしており、この2、3年で2haできる予定。

◎地域営農組合『岳間の杜』では、令和元年からもち米の加工事業を開始。

◎栗の改植については、地域の若者で構成する『西岳農林ロマン部会』が、大粒で高品質な栗生産に欠かせない剪定作業を行なっている。構成メンバーは茶業者をメインに、市の職員など。高齢化した栗農家の手助けにもなり、かつシーズンオフの茶業者の収入源としても役立っている。成果としては、大きく高品質な実がなるので、収入は確実に上がっている。



← 栗の剪定強化で、高品質な栗を収穫し、収入アップを図る。

◎加工品への取り組みは、NPO法人『岳間ほっとネット』が担当し、おせち用に栗のペーストを開発。

NPO法人『岳間ほっとネット』オリジナルのおせち(一人用2000円)の一品としてテストマーケティングをする。評判が良ければ商品化への検討をする。また栗の甘酒も試作し、地域の交流の場『ほっと岳間』で定期的開催されるマルシェで試飲会を行なった。ほかにも茶の加工品として、山鹿羊羹の抹茶バージョンや、柚子フレーバー茶を試作している。



←
NPO法人『岳間ほっとネット』オリジナルのおせち。

◎鳥獣被害防護柵は、平成10年代から進め、平成29年までに77kmまで広がった。現在は100kmになっている。

◆解決すべき課題

◎加工品の試作・試食会を行っているが、商品開発担当のNPO法人『岳間ほっとネット』のマンパワーが足りず、商品化までたどり着けていない。

◎鳥獣被害防護柵は、定期的な見回りの啓発をしていく必要がある。破れた柵の放置や、防護柵の中に新たな電気柵を張っている箇所があるなど、見直し・修繕していく場所が見受けられる。

◆今後の方針

◎栗の剪定は、手を掛ければかけるほど高品質な栗が実り、確実に収入が上がるので、引き続き強化していく。現在は岐阜の菓子メーカーへの出荷がメインだが、将来的には地元で栗の加工品を商品化したい。

◎加工品の試作は、『ほっと岳間』にて定期的に行われるマルシェで試食会などを行い、引き続き商品化へのマーケティングを行う。

◎鳥獣被害防護柵の見回りについては、ある集落では消防団に年間20万円で見回りを委託している。集落ごとで状況は異なるが、特に中山間地ではこのようなケースをモデルにして人員を確保し、見回りの提言・実施をしていく必要がある。

(2)担い手の育成について

◆取り組みの状況

◎大学との連携による農業インターンシップ仕組みづくり

熊本県立大学と連携して『農業インターンシップ』を実施。連休などで時間ができた学生と、収穫期で人手が足りない農家をマッチングさせる仕組み。学生の振り分けは、栗・茶など作物の垣根を越えて、その時々で人手が足りない現場に行ってもらっている。平成30年は茶畑の修復作業、栗の収穫作業をお願いし、令和元年はたけのこ収穫後の片付けをお願いした。

平成30年にインターンシップで来た大学生たちは、同年9月、3班に分かれて作業活動の発表会を行った。また、農業インターンシップの取り組みは、新聞で紹介された。



↑
熊本県立大学との連携によって実施された農業インターンシップ。

◎栗の剪定部隊の発足

3年前に熊本県のモデル事業として発足した『西岳農林ロマン部会』があり、現在も高齢化が進んでいる栗農家の手助けとなっている。



←
西岳農林ロマン部会
による剪定作業。

◆解決すべき課題

◎『農業インターンシップ』で農作業の手伝いを要請した際、現場で学生たちに昼食を提供することを条件にしているが、昼食の用意をする手間が負担となっているところもある。そのため学生ヘルプに頼ることをためらう現場もあるようだ。昼食に手が回らないところは、『岳間製茶』が弁当を作っているので注文制にするとよいのではないか。

◎機械ではできない単純作業には、人手、しかも若い力が必要。

◎大学生の『農業インターンシップ』を継続し、これが将来的にはワーキングホリデーにつながっていくようにしたい。

(3) 基盤整備の実施について

◆ 取り組みの状況

田畑の作業効率化のための基盤整備を進めている。
具体的には以下の通り。

◎ 田畑区画の拡大

大型トラクターで効率よく作業ができるよう、田畑の区画を広げた。傾斜地の田畑の表土を剥ぎ、土をならして1枚に広げた。土建業従事者で定年退職した人がいるので協力してもらい、自力で施工した。

1年目は6枚を1枚にし、28.9aの面積にし、用水路を75mに延長した。平成30年は1箇所、令和元年は3箇所の施工を行った。



←
基盤整備前の水田。複数の区画に分かれている。

基盤整備後の水田。複数の田が1枚となり、大型農業機械の導入が可能となった。

↓



◎ 茶園の整備

作業の効率化・機械化を前提とした茶園の再配置を行った。傾斜地茶園の列を奇数から偶数にする(区画を広げる・傾斜をならす)ことで、茶摘み機の効率を上げることができる。平成30年に1箇所、令和元年に1箇所の施工を実施。平成30年に区画整備をした茶園はすでに茶を植えている。収穫は3年先となる。



←
基盤整備前の茶園。

基盤整備後の茶園(栽培前)。茶畑の列を修正し、作業の効率化を目指している。

↓



(4) 岳間の認知向上について

◆解決すべき課題

◎区画整備に手を上げていた農家も、高齢が理由で「継続的な作業が困難」と申し出るところもあった。

◎茶園の再配置を行う農家が少ない。理由は区画整備の期間は栽培ができず収入減になるため。ある程度の規模の茶園を持ち、計画的に運用できる茶業者でないと再配置の整備は難しい。

◆今後の方針

◎農作業の効率化・機械化・近代化を目指し、区画整備を拡大していく。

◎区画整備を行ったところは収入が上がることを、実績として証明していきたい。

◆取り組みの状況

◎NPO法人『岳間ほっとネット』のFacebook公式ページ『ほっと岳間』を開設。SNSを活用して、岳間の特産物や風景、イベントを紹介し、認知度を上げていくのが目的。令和元年12月現在140人のフォロワーがいる。フォロワーはいつものところ地元関係者がほとんどである。ほぼ毎日更新して岳間の活動をアピールしている。『ほっと岳間』の役員でグループLINEを作っており、そこに各人が情報や写真を投稿している。グループLINEで集まった情報や写真を元に、岳間出身で山鹿市役所の職員が記事化し、Facebookへ投稿している。

◎年4回、『ほっと岳間』にて『マママルシェ』と題したマルシェ(市場)を開催。『マママルシェ』は山鹿の子育て世代の女性たちが中心となって活動している。山鹿の子育て世代とは、岳間の子育て支援センターの職員を介してつながり、活動の場として『ほっと岳間』を貸すようになった。『マママルシェ』では、1ブースで岳間の特産品を販売している。また、カフェスペースを利用し、料理の提供をしている。マルシェは1回につき400～500人の来場がある。



「マママルシェ」。情報発信やテストマーケティングの場として期待されているが、地元の人々との融和やコミュニケーション活性化が課題。



マルシェ開催時には、カフェスペースで岳間の食材を使った料理を提供。

◎NPO法人『岳間ほっとネット』の活動は、平成30年度『熊本県農業コンクール・地域農力部門』で、優良賞(特別賞)を受賞。また令和元年度『あしたのまち・くらしづくり活動賞』で総務大臣賞を受賞した。



←
岳間ほっとネットの総務大臣賞受賞を報じた熊日記事。
(令和元年10月20日付熊本日日新聞朝刊)

◆解決すべき課題

◎Facebookで毎日情報を発信しているが、SNS効果で岳間の認知が拡大したという実感はいまのところない。

◎SNSの投稿は、写真を撮った方がいいが、すぐに記事をアップすることができず、タイミングを逃してしまうことがある。また投稿の手間がかかることが課題。

◎地元の人はマルシェになかなか来ない。地元の人に会場してもらえような工夫が必要。地元の年配者は会場してくれるものの、若い世代のイベントなので「自分たちには合わない」と思われる人もいようだ。

◆今後の方針

◎Facebookページ『ほっと岳間』は引き続き頻繁に更新し、岳間の情報発信チャンネルの拡大ツールとして活用していく。

◎マルシェは、商品開発のテスト販売の場としても活用できるため、引き続き加工品の試作の試飲・試食会を行っていく。

◎マルシェの場で、どのような交流が生まれて発展していくかはこれからの課題である。

→
あしたのまち・くらしづくり活動賞の表彰式



→
Facebook『ほっと岳間』はほぼ毎日更新。イベントや季節ごとの風景写真を紹介。



5. まとめ:成果と今後の展開方向

◆成果目標

- ・碾茶用茶葉の栽培面積を2ha以上増加させる。
- ・観賞用ホオズキの作付面積を10a増加させる。
- ・ワーキングホリデーを1回以上実施する。

(1) 全体的な成果

① 田畑・茶畑ともに、平成30年度から令和元年度にかけて基盤整備を着々進行。

◎ 田畑の基盤整備

平成30年度、令和元年度で4箇所の整備を行った。

◎ 茶園整備

平成30年度、令和元年度で2箇所の整備を行った。

② 熊本県立大学との連携で「農業インターンシップ」を実施！

熊本県立大学との連携で、『農業インターンシップ』を実施。担い手不足を解消するために、大学生が茶園の被覆作業・栗収穫作業・たけのこ園の整備作業に参加した。

③ 「ほっと岳間ネット」の活動が、高い評価を獲得。

NPO法人『ほっと岳間ネット』の活動が、平成30年度『熊本県農業コンクール・地域農力部門・優良賞(特別賞)』を受賞、令和元年度『あしたのまち・くらしづくり活動賞・総務大臣賞』を受賞し、対外的に評価された。

(2) 今後の展開方向

① 変化するお茶の需要。求められる需要変化への柔軟な対応！

農業ビジョン策定時と、2年経過した現在では、需要が変化している。当初、需要拡大が見込めた碾茶は、現在は飽和状態となり、中国で栽培がスタートするなど状況が変わってきた。

引き続き、碾茶・抹茶の栽培を検討しつつも、流動的な需要に対応していかねばならない。

② 茶園整備拡大の限界。

茶園整備・再配列に対応できるのは、ある程度の茶園規模を持つ茶業者に限られてくる。

③ 「農業インターンシップ」の受け入れ体制の整備が課題。

大学生に農作業を手伝ってもらうために、その受け入れ体制が整わないところもある(例:昼食の用意など)。

④ 人材不足で商品開発が足踏み。

加工品の試作や試食会は行っているが、人手不足のため商品化までたどりついていない。

⑤ 高齢化による耕作放棄の加速。耕作放棄地の扱いも課題。

農業ビジョン策定時には、取り組みに賛同していた農家も、高齢化に伴い作業が難しくなりつつある。

耕作放棄地は農業振興地域から外し、山林などに戻した方がよいのではないかと。

⑥ 鳥獣防護柵の見回りと改善。

防護柵を延ばしたものの、その後、柵が破れたまま放置されていたり、さらに電気柵を設けるなど防止策が無駄になっている箇所がある。

定期的な見回りを行い、改善を促す必要がある。